

Maurice Merleau-Ponty

の〈身体〉概念の検討

杉山 進

On the "body" concept of Maurice Merleau-Ponty

by

Susumu Sugiyama

Abstract

In the paper the "body" concept developed by Maurice Merleau-Ponty was evaluated in terms of the interpretation of its original conceptualization and its possible application to the construction of a new approach to a theory and practice of physical education.

Materials for evaluation were selected from his original translations in Japanese and several critical reviews on the Ponty's theoretical works written by leading authors in this field.

As the result from this evaluation it might be said that the Ponty's key concept, such as "the body being in the world", "function", "body schema", and "the acquisition of habits being arrangement and renewal of body schema", could be introduced to the theory structure of movement education and/or physical education. This possible was tentatively in the last part of the paper.

序

体育学において、身体の意味を理解することは、重要な問題の1つである。前川が述べているように、体育の“体”が、“Physical” Education, “Leibes” Erziehung にみられる如く、身体的なものを指すとすれば、何が、身体的なもの、あるいは、身体であるのかを明確にしなければ、そのための教育としての体育について基本的なものを欠くことになる¹⁾。であろう。

私は、ここで、身体が、西洋哲学史上、心身関係論の中で、心的内容(唯心論)、物質(唯物論)、あるいは機械(二元論)として扱われてきたことを問題にするのではない。デカルトが、「情念論²⁾」において、心身の関係を問題にしなければならなくなった日常的な生活場面での身体を問題にしようとするのである。

サルトルによれば、日常的な世界にあっては、身体は3つのdimensionにおいて把握されるといふ³⁾。①、何かに夢中になっている時、全く忘れ去っている私の身体(主体的身体)、②、私の裸体を他人に見られた時、恥ずかしいと感じる私の身体(対他身体)、③、他人によって物として扱われるような身体(対象的身体)として把握されるといふ。

私は、このように、身体を現象学的立場から捉えようとするのである。「人間存在にとって身体とは何か」、「身体は、人間存在にとってどんな意味をもつか」を問題にしようとするのである。

このことは、生理学的、解剖学的な身体に関する知識を寄せ集めても、この間に答えることは無理であることを示している。科学的な世界は、日常生活世界を基盤にして成立しているのである。順序は逆なのであって、「人間存在にとっての身体」から出発して、生理学的、解剖学的な知識を理解しようとするものである。

本小論においては、フッサール(Husserl, Edmund 1859~1938)に始まる現象学の影響を受けた、Maurice Merleau-Ponty(1908~1961:以下ポンティと略す)の身体論を取り上げる。ポンティは、最近、日本での身体に関する多くの論文や著作において、必ずといってよいほど引用される

現象学的身体を扱った代表的哲学者である。彼の名著である『知覚の現象学』と『行動の構造』から、ポンティが、生理学、心理学、精神医学に関して深い知識をもっていることがうかがえる。ポンティを取り上げた理由は、幅広い科学的知識を背景とした彼の哲学が、「人間存在にとっての身体の意義」を主題的に取り上げているからである。

本小論の目的は、ポンティの〈身体〉概念を、体育的視点から検討しようとするものである。その為に、ポンティの〈身体〉概念とはどのようなものなのかを、1) “主体としての身体”の概念および、2) “習慣”の概念において検討し、ポンティの〈身体〉概念が、どのように体育へ適用されることができうるかを、3) “体育への適用”(試論)において提示する。

研究方法は、文献—ポンティの著作の翻訳書、解説書、そして現象学に関連した著書—によるもので、後に主要参考文献として掲載してある。

文中の〈身体〉は、ポンティの身体概念としての身体を示す。

1 主体としての身体

ポンティの身体論の最大のテーマは、クワントが解説⁴⁾しているように、「身体は主体である⁵⁾」ということであろう。換言すれば、「私は私の身体をもつ」のではなく、「私は私の身体である⁵⁾」ということである。道具のようにもったり、もたなかったりすることができるようなものではなく、常に「私と共にある」といったそういうものである。ポンティによれば、身体を機能として、はたらいっている限りでの生きている身体として捉えてこそ「私と共にある」身体について語るができるという⁶⁾。そのことの意味は、科学の教える知識によってではなく、我々が日常生活の中で、内から経験する身体について考察しなければならないことを示している。

市川⁷⁾によれば、身体の“はたらき”には、行動、知覚、情動、反射運動、ホメオスタシスの5つが考えられるというが、ここで、“主体としての身体”について検討する場合、人間の認識過程の最初の段階であり、人間が行動する際、最初の手がかりを与えてくれる知覚を取り上げるのが順当

であろう。

Ⅰ 身体の両義性

知覚は、その成立基盤を身体（機能）に負っている。知覚が身体のはたらきであることは、次の例で示すことができよう。

例えば、「コップを見る」時、我々は常に、“今”、“ここ”で、コップの一面のみを見ることができている。真横から見たコップは長方形で、真上から見たコップは円であるが、それらは、コップの形状の一部分でしかない。また現に見ているコップを、夢の中に現われたコップなどと考えることは決してなく、常に現実の出来事として把握している。もし、知覚が、精神によるはたらきならば、自由にその立脚点を変えて、あそこから見たコップ、昨日見たコップといった如く想像できることであろう。

知覚している、はたらいっている身体とは、精神と対立させられた意味での身体ではない。それは、物質的でも精神的でもあるといった両義的な存在である。例えば、二重感覚⁸⁾についていえば、右手で左手を触れている場合、同じ私の身体である左手が、触れられるものとして現われ、また右手が触れるものとして現われる。次に左手で右手を触れる場合には、それが逆転する。両方の手の平を合せた時には、全くこの関係はあいまいである。つまり、私の身体とは、即自 (an sich) でもあり、対自 (für sich) でもあり、受動且つ能動といった両義的なものであり、身体(の触れる)はたらきにおいて、即自(触れられるもの)と対自(触れるもの)が区別されるのである。

Ⅱ 図と地

ポンティの“図と地”の概念は、ゲシュタルト心理学から学んだものである。“ゲシュタルト”とは、“形態”、つまり“図と地”の構造を示すものである。

例えば、メロディーの移調可能性についてみてみよう。A音列は、B音列に移調可能であるという時、A音列のa音階とB音列のb音階とが対応するとする。しかし、a音階とb音階とは、そのもの自体を比較すれば、全く異っているが、A音列に

おけるa音階、B音列におけるb音階としてみれば、両者とも全く同じ役割をするものと考えることができる。つまり、A音列の中のa音階、全体の中の部分という関係として扱って初めて、a音階の本質を捉えることができることを我々に教えてくれる。

聴覚におけるこのような現象、即ち、全体と部分の関係は、視覚においても同様であり、“図と地”の構造として考察される。白地の赤を見る時と青地の赤を見る時とでは、同じ赤でも全く異った印象を受ける。また、

Rubinの図形やBoringの図形⁹⁾にみられるように、全体の中で、盃と人の顔が反転したり、嫁の横顔の輪郭が義母の鼻の形に転換したり、図と地の反転が起こる。しかし、

これらの図形は、我々の側の取捨選択というよりは、図形が、己れを表現し、それを我々が受け取るといった具合に見える。なぜなら、特にBoringの図形において、一旦嫁に見えた図は、義母には見えにくいといった事実があるからである。また、これらの図形の教えるところは、“地”とは、あってもなくてもよいものではなく、“図”を支えているということである。

ポンティは、知覚におけるこのような“図と地”の構造を根源的なものと考え、身体の“はたらき”にも適用する。全体としての知覚能力を“地”として、その都度、見る、聞く、嗅ぐ、触れる、味わうという機能が各々構成されるのだという。故に、眼に見えるビーフステーキは、おいしそうなよい香りをもった、舌ざわりさえ感じさせてくれるものとして見えることもある。つまり、身体の知覚能力を“地”として、各々の知覚機能は、他の知覚機能に転調可能であるというのである。こ



(Ⅰ) Rubinの図形
(人の顔か、盃か)



(Ⅱ) Boringの図形

れは、単に外部知覚だけでなく、後に見るように、内部知覚をも含めたはたらきとして考えられている。

身体のはたらきを“地”として、事物が“図と地”の構造の中で見えてくるのである。はたらいっている身体にあっては、“世界”(知覚する世界)が同時に存在するのである。このことは次のようなことを示している。まず、身体と世界が存在し、次に、身体のはたらきによって、世界が知覚されるというのではなく、まず最初に、身体のはたらき⁹が、その契機として身体と世界が区別されるということを示している。身体のはたらきを、ポンティは、「われ思う」ではなく、「われ^{注2}能う¹⁰」であるといっている。

iii 意味付与

以上みたように、身体のあり方、具体的には機能の構造化が成立することによって、事物がいろいろな“意味”の対象となる。例えば、「コップを見る」時、喉が渇いている時には飲む道具として、怒っている時には武器として見えるように、知覚において、身体は事物と意味的な関連をもっている。この関わりを、ポンティは、“身体の志向性”と呼んでいる。“志向性”という概念は、ブレンターノ^{注3}が、意識の根本的な特性として示したもので、「意識とは、常にあるものについての意識である」といわれる。逆にいえば、何かを意識対象としてもたない意識はあり得ないということである。

しかし、ポンティのいう“身体の志向性”は、意識のそれとは区別されなければならない。なぜなら、知覚における身体のはたらき(眼を開き、瞳孔を調節するなどはたらき)は、「コップを見る」ということの中では意識されていないからである。また、コップが水を飲む道具、あるいは武器として見える時には、意識は、水あるいは怒りの対象を志向しており、“身体の志向性”は、この意識を底から支えているといえるからである。このような“身体の志向性”は、意識と区別され“前意識”と呼ばれている。“前意識”とは、その時には意識されないが、一瞬後に意識しようとするれば意識することができる意識である。

常に私と共にある身体は、「コップ(事物)を見る」時には意識されない。しかし、一瞬後、眼を閉じればコップは、私の視野から姿を消すし、欲求や情動が治まった後に反省してみればコップの意味が意識される。このように、事物を知覚する為の“地”としての身体の“志向性”は、前意識的なものである。湯浅^{注4}や市川^{注5}が述べているように、この“前意識”の底層には、自律神経系のはたらきのような、決して我々に意識されることのない無意識の層が広がっているということも本当であろう。

クワント¹¹によれば、ポンティは、このような前意識的な段階での“意味付与”を、次の3点、[方向づけられた空間]、[性的な意味]、[知覚の意味]から例証しているという。

我々の生活している空間は、身体の有する“ここ”の位置から生じる、上下、前後、左右という意味をもっている。身体の性的興奮は、知覚対象が異性に限らず、或る種の記号、動作、絵、写真に対しても生ずるが、これは、前意識的に意味が付与されていることから生ずるのである。知覚においても、前述したように“図と地”の構造は、「もっかのところ図を主題にしている」という意味をもっている。しかし、このような意味の湧出も、知覚できる世界を基盤にしている。〈身体〉によって外的な世界は、知覚できる世界として同時に存在し、その限りで既に“意味付与”されているのである。

このような〈身体〉と事物との意味付与の関係は“弁証法的関係”である。ちょうど、食物が我々の身体に栄養を与えてくれる為には、食べることのできるものとして、我々の前に現われてこなければならぬような関係である。環境を環境たらしめる弁証法的な意味付与が、主体の性格である。コフカ^{注6}が提唱した行動的環境も身体の意味付与によって成立するものであるといえる。

身体の両義的性格、即自でもあり対自でもあるこの性格は、意味付与に関していえば、両者の弁証法的な関係をいったものである。前者は、既に獲得された“身体のはたらき”の意味のことで、後者は、「より高度の形成作用に向って絶えずおのれを上昇させてゆく¹²⁾”“身体のはたらき”の意味

のことである。“主体としての身体”は、世界と絶えず絡み合って、意味を弁証法的に統合してゆく。

2 習慣

ポンティの身体論において特筆すべきことは、“習慣”の概念であろう。これは、渡辺が“身体的知¹⁷⁾”としてあげたもので、非常に興味深いものである。

“習慣”とは、まさに我々の身(ミ)についてのものである。“身”の概念については、市川が「身の構造¹³⁾」で、“身”の主體的で多義的な意味を述べているが、ポンティの〈身体〉概念とその基本的な性格においては同じである。考え方の癖というものも、根源的には〈身体〉における“習慣”に基いたものであるということ、意識における意味が〈身体〉における“前意識の意味”のとらえ直しであるということから演繹される。

ポンティは、“習慣”を説明する際、再三再四〈身体〉の“世界内存在”ということを行っている¹⁴⁾。この間の事情をながめてみよう。

“世界”とは、1)のii)“図と地”で述べたように、〈身体〉における知覚世界の全体のこと、ここでは、知覚対象は“図と地”の構造という意味として把握される。“世界”とは、このような意味の全体をいう。つまり、「世界は、個人がそのなかに存在し、その構成に彼が参加している有意味な諸関係の構造である¹⁵⁾。」

世界内における主体は、精神ではなく〈身体〉である。〈身体〉は、精神のように、時間や空間から自由であることはできない。〈身体〉は、時間や空間を己れ自身に引き受け存在している。故に、前意識的な〈身体〉の経験の構造と“世界”の構造とは同じものである。“世界”と〈身体〉のこのような弁証法的な関わりは、いってみれば、絶対的な自由性ではなく、制限的な自由性であり、その意味で本当の自由であるといえるかもしれない。“習慣”は、“世界内存在”としての〈身体〉と“世界”との関わりにおいて形成されるのである。

i 習慣的身体¹⁶⁾

まず、ポンティが“習慣的身体”という言葉

提出してくる背景についてみてみよう。幻影肢¹⁸⁾の現象について、患者は彼のなじみ深い状況におかれた時に、切断された自分の手足の不在を拒否するという。しかし、別の状況では、手足の不在を認めるという。

この説明に関してポンティは、生理学的な説明(「幻影肢とは、或る表象の実際の現前である¹⁷⁾」)も心理学的な説明(「幻影肢とは、或る実際の現前の表象である¹⁸⁾。’)も、「不在と現前とのあいだに中間者を認めない客観的世界の諸力テゴリーを適用している¹⁹⁾」ことから不十分であるとして、実存的分析に訴えようとする。

前述したように、ポンティは、このような内部知覚においても、我々の身体の両義性、つまり不在(即自)でもあり、現前(対自)でもあるという両義的な性格をあてはめる。患者と周囲の状況との関わり方において、幻影肢が、現われたり、現われなかったりするということである。不在を拒否する際に現われる身体像を、ポンティは“習慣的身体”と呼び、不在を認めた際に現われる身体像を“現勢的身体¹⁹⁾”と呼んでいる。つまり、不在における現前を物理的な外的世界にも、心的な観念にも環元しないで、“世界”と〈身体〉との意味的関係において説明しようと試みているのである。

ii 身体図式

ポンティによれば、「身体図式(body schema)とはヘッドがはじめて用いた言葉で、われわれが自分の身体にもつ心像のこと²⁰⁾」であったらしい。しかし、ポンティは、ここでもこの言葉を自分の〈身体〉概念に則して理解しようとする。彼のいわんとするところは、“図と地”のところで述べた諸知覚の転調可能性を保証する“系”であるというのだ。“系”とは、これら諸知覚の関係の全体、要するに“知”であるというのである。

ポンティはいう。“身体図式”とは、「私の身体の一部の行なう各運動に応じて、私の身体の諸部分におこる位置の変化、各局部的刺激が私の身体全体のなかで占める位置・或る複合的所作の行われるたびごとに遂行される運動の便覧、そして最後に、そのときどきの運動感覚的ならびに関節的諸印象の、視覚的言語への不断の翻訳²¹⁾」を可能

にするものである。

① ポンティのいわんとすることを、「コップを握る」運動を例にとって説明してみよう。

② コップを握る為には、私はコップと私の身体の位置を視覚によって把握し、手がコップにまで届かなければ、一歩進んで片手を突き出す。コップが下であれば下に、右であれば右に手を動かし、次に5本の指を広げて、落ちない程度に、また壊さない程度に握る。しかし、幼児でない正常な私は、このようなことを1つ1つ意識しなくても一挙にコップを握ることができる。

③ ポンティはこれにどう答えているであろうか。彼なら次のようにいうであろう。「確かに意識せずとも一挙にコップを握ることができるが、理論的には、以下のことが成立していなければならない。」つまり、「手の位置の変化・コップを握った時の刺激の位置、コップを握る際の5本の指の各々の運動、そして、肩、肘、手首、指の関節の諸印象や腕、手、指の運動感覚的諸印象が、視覚的意味に翻訳されていなければならない。」というであろう。

④ ポンティは、このような翻訳を可能にするものとして、理論的に“身体図式”が想定されるというのである。英語を日本語に翻訳する為には、日本語の体系と英語の体系を知り、なおかつ、両言語の体系間の関係をも知っていなければならないように、“身体図式”は、運動的意味の体系と知覚的意味の体系を統合しているものであるといえよう。

⑤ 故に、“身体図式”とは単に、「幼児期の過程で、触覚的、運動感覚的、ならびに関節的諸内容が相互のあいだで連合し合い、あるいは視覚的諸内容とも連合して、それらをますます容易に喚起するようになるにつれて、少しずつ組み立てられて行ったもの²²⁾」というのでは不十分で、むしろ、その本質的含意は、それらの連合を可能にするものというべきであろう。要するに“身体図式”は、「相互感覚的世界における私の姿勢についての包括的な意識、ゲシュタルト心理学の意味における1つの〈形態〉である。²³⁾」

⑥ “身体図式”が“形態”であるということは、以下のことを表わしている。

⑦ 幻影肢が現われるということは、“身体図式”が、

「存在している身体諸部分の単なる複写でもなければ、その包括的な意識ですらもないからであり、“身体図式”がそれら諸部分をば有機体の行動の計画にたいするそれらの価値の比率にしたがって積極的に己れのなかに統合するからである²⁴⁾。」故に、不在である手足が、“習慣的身体”として、“図”として形態化されることができるのである。

⑧ “身体図式”は「私の身体が、現勢的または、可能的な或る任務に向ってとる姿勢として私にあらわれる²⁵⁾。」とポンティはいう。〈身体〉は、任務によって、つまり世界との弁証法的な意味的關係、“身体の志向性”によって形態化されるというのである。“現勢的任務”とは、既に“身体の志向性”によって状況づけられた〈身体〉のことで、可能的任務とは、今だ状況づけられていない〈身体〉のことである。このことを、ポンティは、シュナイダー²⁶⁾の「具体的運動」と「抽象的運動」の例をもって説明²⁶⁾している。

⑨ 患者は、自分の身体の或る箇所を把握（具体的運動）しろという命令ならば遂行できるが、その箇所を指示（抽象的運動）しろという命令を遂行できないという。このことの意味は、患者にとっては、把握と指示が、まったく異った運動的意味をもっていることを示すものである。つまり、その箇所が、把握する為の対象としては現われるが指示する為の対象としては現われないということである。患者にあっては、今まで経験し、習慣化した〈身体〉(把握できる身体)としては理解できるが、そのようなものではない〈身体〉(指示できる身体)としては理解できないでいる。これから現勢的な任務と、正常な人ならすぐに遂行できる可能的な任務が区別される。つまり、正常者にあっては、可能的な任務にも、〈身体〉を適用させることができ、その意味で、〈身体〉の経験をより豊かにすることができるわけである。

⑩ 運動における“習慣”とは、例えばタイピスト²⁷⁾がキーボードのキーと或る記号を対応させないで、メロディーのように流れるように打つことができるようなものである。つまり、各々のキーの位置を自分の身体の一部のように、どこにあるのかを一挙に知っているように、体系化させることである。キーボードを“身体図式”の中へ組み

込むわけである。ちょうど、盲人の杖²⁸⁾の先に、自分の手の平や眼までもがついているように、道具を自分の身体に統合することである。「習慣の獲得とは、身体図式の組み換えであり、更新である²⁹⁾」

要するに、ポンティの〈身体〉概念とは、身体のはたらきの枠組みであり、身体の実験作用の枠組みであるといえる。この枠組みの全体を、彼は“身体図式”と呼んでいるのである。個人が、状況(世界)の中で、行動すると同時に、個人の身体は、全体の枠組み(身体図式)の中で或る“意味”をもった形態化(或る1つの枠組み)を行なう。この“意味”によって“形態”(或る1つの枠組み)を形成し、状況(世界)との意味的関連を形成することが“身体の志向性”と呼ばれるのである。そして“習慣”とは、この機能の形態化(或る1つの枠組み)が習慣化することである。

3 体育への適用

体育学が対象とする身体は、現実の状況の中で、主体的に生きている個人の身体である。「生きている」とは、単に生物学的に「生きている」のではなく、人間として「生きている」ということである。ポンティによれば、「生きている」とは、身体が世界内存在の主体であり、身体が“はたらき”であるということである。そして、即自から対自へと弁証法的な上昇運動の過程にある身体であるということである。もっと簡単にいえば、体育学が対象とする身体は、個人の主体としての“はたらき”であり、はたらきにおける“経験”であるといつてよい。

故に、身体の実験作用とは、単に形態的、運動能力的なものであるばかりでなく、〈身体〉が世界との絡み合いの中で、即自—対自—即自……(統合—分化—統合……)と、常に未完結で、開かれたものとしての“身体的知”の発達であるといえる。

身体運動とは、上に述べた意味での行動である。つまり、〈身体〉が、世界との絡みの中で意味を付与する運動であるといえる。この身体運動の意味は、3つの次元から理解されるだろう。①、道徳的、倫理的な意志を伴った行為(人間的意味)、②、

本能的行動など(生物学的意味)、③、落下の法測に従った運動など(物理学的意味)から捉えられる。これら3つの次元の意味は、個人の行う身体運動の中で、この個人が取り込まれている状況(世界)との関わりにおいて、必然的に一体として統合されるものと考えられる。

体育の役割とは、常に発達的に形成される主体的なはたらきとしての身体の実験作用を、より豊かにさせてゆくことであるとも考えられる。泳ぐことのできない子供が、泳げるようになった時、子供は、自分の身体のはたらきを創造(可能性から現勢へとという意味で)したといえる。同時に水は、恐怖の対象から子供が泳ぐことを可能にさせるものとして、意味を付与されたことになる。このように、多様な運動を獲得することによって、身体の実験作用のプログラムが拡大され、同時に運動の意味も拡大されてゆく。例えば、サッカーボールが、単に蹴るだけの対象から、次第に、止める、ドリブルする対象になってゆくと同じように、我々は、存在する多くの運動状況に、個人特有の運動の意味を付加してゆくことができる。即ち、個人内において、主体的に運動的世界を創造してゆくともいえる。してみると、体育の教師は、まず、運動的世界の創造に向かう生徒に対して、自らがこの創造の主体であること、つまり、運動を通して能動的に自らの世界内存在を自覚させるように促すことが重要な役割となるであろう。その自覚的活動によって、生徒は、身体運動の価値を体得することができるようになる。K. SEYMOURの言葉³⁰⁾を借りれば、“To develop an awareness of bodily being in the world”である。その為には、安全で、より確実に、運動経験を積み上げてゆくことのできるプログラム(場)を提供することが必要であろう。

身体図式は、身体の実験作用(反射運動をも含めた)学習において発達的に形成され、“拡大”と“分節化”を生じる。

身体図式の“拡大”とは、具体的には、道具の使用などによって“身体空間^{注1)}”を拡大させることである。“分節化”とは、例えば、より速く、より正確にボールを投げる場合、ボールの握り方や、肩、肘、手首の関節の動かし方が異なるように、

いってみれば、運動学習によって運動のポキャブラリーを豊富にすることである。また、初級者にあつては、サッカーゴールの空間は、単にそれ以外の空間と異つているといった意味しかもち合わせていないかのようにみえるが、これは、熟練者におけるシュート能力と初級者のシュート能力との違いによると考えられる。つまり、シュート能力の違いによって、ゴールの空間の分節化に相違があることを示していると考えられるのである。

このように、身体図式の“拡大”と“分節化”は、次第に習慣化される。習慣の積み重ねによって、以前に習慣化された運動は、改めて統合されてゆき、より複雑な運動ができるようになる。体育における運動学習とは、身体図式の習慣化であるといえよう。

運動技能の診断においては、体育教師(スポーツコーチ)は、ちょうど、精神科医が、患者と一緒になつて、患者の生活経験の中からその病気の原因を探るように、生徒(選手)が今まで経てきた運動経験の中から、どのようにして己れの身体の諸部分を(運動的意味で)価値付けてきたかを探るといふように、ポンティの身体図式とその形成(習慣化)の概念を適用することが可能であろう。

結 語

ポンティの〈身体〉概念は、運動意味論、運動の発達理論、及び、運動技能の習熟と診断法において、身体の運動を解釈する為の説明概念として非常に多くの意味をもっていると考えられる。

この概念を実証的に検討するのは、体育学研究においては、主として体育心理学の領域に属すると考えられる。ポンティの〈身体〉概念を体育的視点から更に検討する為には、体育心理学における研究の成果に即して、この概念の解釈の可能性を検討してみることが意味があるように思われる。

注

注1 「主体(Subject)とは、元来、主観と呼ばれていたものであったが、実存哲学の登場と呼応して、主観と区別されて使われるようになった。主観が、認識論的な意味において、超個人的、形式的、純粋な意識と解されるのに対し、主体は、存在論的、倫理的、実践的な意

味において、意識と身体をもつ存在者、行為し働く個体的発動者を意味する」もちろん、ここで使われている主体の意味は違う。ポンティは、人間存在の主体性を、身体においてみているのである。

(哲学事典, 平凡社, 1980)

注2 (われ)の()を付けた理由は、身体が、前人称的であるから。つまり、身体とは、私の内の誰かである前意識的な存在である。

注3 Franz Brentano (1838~1917) オーストリアの哲学者、心理学者、フッサールに多大な影響を与えた。

注4 湯浅は、ポンティの扱った身体とは、表層的構造(生理学的には、大脳皮質にその中枢をもつ、外界知覚と運動性内部知覚)だけであり、不十分であると述べている。表層的構造の底層には、それを支える基底構造(情動と自律系内部知覚)が存在すると述べている。(湯浅泰雄, “東洋の身体論への視座”, 「現代の眼」, 1978, 10, PP. 96~107)

注5 市川は、『精神としての身体』の第2章「構造としての身体」で「身体のはたらきを、志向的構造(情動、知覚、行動)と、向性的構造(ホメオスタシスをはじめとして、一般に自律神経系や内分泌系に支配される活動と、反射運動にみられる脳、脊髄神経に支配される活動)とに区別し、後者は、前者のサブストラクチャーとしてはたらく」と述べている。(市川浩, 『精神としての身体』 PP. 55~75)

注6 Kurt Koffka (1886~1941) ドイツからアメリカに渡った心理学者。知覚研究によってゲシュタルト理論に貢献した。

注7 渡辺は、身体の問題を考える場合には、3つの領域があることを述べている。①、ポンティのように、哲学的反省の対象として扱う領域。②、実践の場で捉えられる「身体的知」といったものを扱う領域。a) 表現のレベルで身体を扱う領域(演劇、舞踊)。b) 身体技を扱う領域(武道、スポーツ)。③、政治や経済との絡みの中で身体を扱う領域。(渡辺守章, “身体表現と身体観”, 「新体育」, Vol. 48, No. 13, 1978)

注8 手術によって、手あるいは足を切断された人が、切断された手あるいは足が実際に在るように感じる現象。

注9 現勢態“energeia”と同じ意味であろう。エネルゲイアとは、アリストテレスの用語である。例えば、大工が家をつくる時、大工の頭の中には、つくろうとしている「家」がある。この場合、家の材料があるにもかかわらず、家ができていない状態を(家の)可能性といい、家ができあがった時の状態を(家の)現勢態と呼ぶ。(哲学事典, 平凡社, 1980)

注10 「後頭葉に戦傷を受けた兵士のことである。失認の好症例として脳病理学史上有名になった……主要症状は、失読を伴う精神盲……文字、幾何学図形等のごく単純な形態把握も純視覚的には殆んど不可能……頭、

その他の身体部位で形態の輪郭をたどる追跡運動を行なうことによつてのみ、その形態の把握に成功した。……日常の物体認知は一応可能であったが、やや見慣れない物についてはよく失敗した。……」(メルロ＝ポンティ、『知覚の現象学』、P.340)

注11 市川によれば、皮膚によつておわれている生得的な身体空間から、習慣による道具の組み込みによつて生じる固定的な身体空間に至るまでの前意識的な身体の有する空間のことである。(市川浩、『精神としての身体』、PP.10～19)

主要参考文献

- 1) メルロ＝ポンティ、竹内、小木訳、『知覚の現象学 I』第8刷、みすず書房、1973
- 2) メルロ＝ポンティ、滝浦、木田訳、『行動の構造』、第10刷、みすず書房、1971
- 3) メルロ＝ポンティ、滝浦、木田訳、『眼と精神』、第13刷、みすず書房、1976
- 4) レミ C. クワント、滝浦、竹本、箱石訳、『メルロ＝ポンティの現象学的哲学』、国文社、1976
- 5) 市川浩、『精神としての身体』、第5刷、勁草書房、1976
- 6) 木田元、『現象学』、第4刷、岩波新書、1973

引用文献

- 1) 前川峯雄『体育の原理』大修館、1970、PP.39
- 2) 野田又夫編集『世界の名著、デカルト』中央公論社、1967
- 3) K, SYMOUR, "The Significance of Human Movement; A Phenomenological Approach", in 『Sport and the Body: a philosophical Symposium』 edited by Ellen W. Gerber & William J. Morgan, Lea & Febiger, Philadelphia, 1979, PP. 177～178
- 4) レミ C. クワント、滝浦、竹本、箱石訳、『メルロ＝ポンティの現象学的哲学』、国文社、1976

- 5) メルロ＝ポンティ、竹内、小木訳、『知覚の現象学 I』第8刷、みすず書房、1973、P.250
- 6) メルロ＝ポンティ、前掲書、PP.160～161
- 7) 市川浩、『精神としての身体』、第5刷、勁草書房、1976、PP.55～122
- 8) メルロ＝ポンティ、前掲書、PP.164～165
- 9) 谷口隆之助、早坂泰次郎、佐藤功、『人間存在の心理学』、川島書店、1967、P.158
- 10) メルロ＝ポンティ、前掲書、P.232
- 11) レミ C. クワント、前掲書、PP.46～55
- 12) レミ C. クワント、前掲書、P.91
- 13) 田島節夫、坂本賢三、市川浩、坂部恵、村上陽一郎、『現代の哲学 2、人称的世界』、弘文堂、1978、PP.105～175
- 14) メルロ＝ポンティ、前掲書、PP.239～246
- 15) ロロ・メイ、E. エンジェル、H.F. エレンガーバー、伊藤、浅野、古屋訳、『実存』、岩崎学術出版社、1977、P.91
- 16) メルロ＝ポンティ、前掲書、PP.145～149
- 17) メルロ＝ポンティ、前掲書、P.145
- 18) メルロ＝ポンティ、前掲書、P.145
- 19) メルロ＝ポンティ、前掲書、P.145
- 20) メルロ＝ポンティ、前掲書、P.340
- 21) メルロ＝ポンティ、前掲書、P.173
- 22) メルロ＝ポンティ、前掲書、P.173
- 23) メルロ＝ポンティ、前掲書、P.174
- 24) メルロ＝ポンティ、前掲書、P.174
- 25) メルロ＝ポンティ、前掲書、P.174
- 26) メルロ＝ポンティ、前掲書、PP.179～235
- 27) メルロ＝ポンティ、前掲書、P.241
- 28) メルロ＝ポンティ、前掲書、P.240
- 29) メルロ＝ポンティ、前掲書、P.239
- 30) K, SEYMOUR, 前掲書、P.179